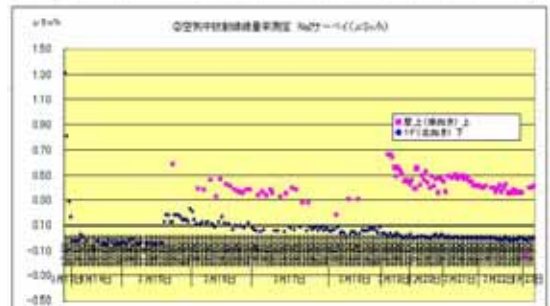
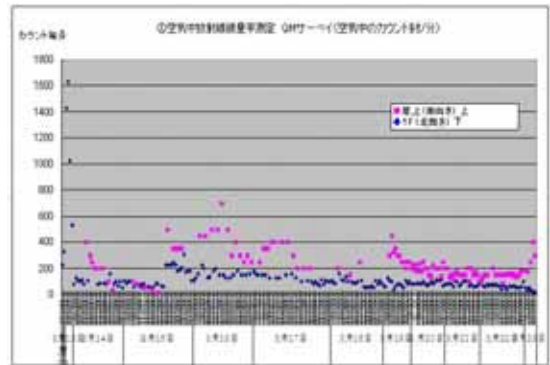


福島第一原発事故における東北大学の緊急被ばく対応について

宮城県立がんセンター 小野寺 保

福島第一原発事故の対応について

宮城県立がんセンターでは、福島第一原発の事故発生時から、院内の測定器を用いてモニタリングを開始しました。原子炉建屋の水素爆発後の3月12日は、原発から85 Km離れた宮城県名取市でも放射線を観測しました。数値自体は、直ちに健康与えるレベルではありませんが、通常のバックグラウンドより高かったため、その後は、放射線技術部全員で昼夜を問わず測定をしました。



宮城県立がんセンターのモニタリング結果

測定場所での違い

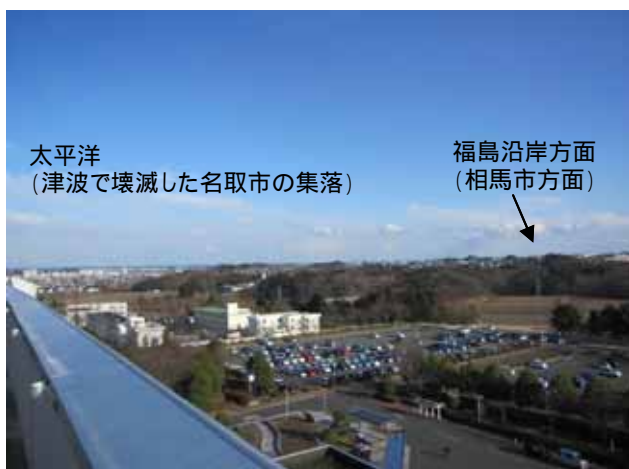
当初、放射線技師室(1F)からモニタリングしていましたが、屋上(7F: 海拔66m)から原発方面に向けて測定した方が、正確なデータが得られると考え、測定ポイントを追加しました。

その結果、同時刻の測定結果でも、数倍の差があることが判明しました。

また、山形大の根本教授が開設した「東北がんネットワーク」が東北各地の線量率共有をしたいと要請から当センターからもデータを提供しました。

そこから得られた情報から、地面や排水溝も測定したところ、さらに数倍の差がある値が検出されました。

値自体は、問題ない数値ですが、測定場所の統一が重要であると認識しました。



がんセンター屋上からの眺望(海拔66m、南東)
(屋上の測定ポイントから太平洋福島方面を望む)